

大鏡『三舟の才』定期テスト対策問題 | 現代語訳・和歌・敬語の頻出設問と解答

解答・解説

問1 (1) 尊敬 (の助動詞)。

(2) 二重敬語 (最高敬語)。

(3) 舟遊びを催した主体である入道殿 (藤原道長) に対する敬意。

※「せ給ふ・させ給ふ」は、尊敬の助動詞「す・さす」＋尊敬の補助動詞「給ふ」が重なった二重敬語で、天皇・皇族や摂関などきわめて高貴な人物に用いる。ここでは催し主の道長を高めている (作者から道長への敬意)。

問2 (1) 気ままにあちこち歩き回って遊ぶこと。舟遊び・散策などの遊覧。

(2) すぐれている。その道に堪能である (熟達している)。

(3) かい (甲斐)。期待した効果・値打ち。「申し受け (自分から願い出) たかいがあつてみごとにお詠みになった」の意。

(4) 残念だ。くやしい。期待外れで物足りない。

問3 (あの入道言は、) どの舟にお乗りになるのがよいだろうか。

※「いづれの舟にか」の「か」は疑問の係助詞で、結びの「べき」(連体形) と係り結びになっている。「乗らる」の「る」は尊敬の助動詞、「べき」は適当・当然 (～のがよい・～のがふさわしい) の意。

問4 イ 尊敬。

※「(入道言が) いづれの舟に乗らるべき」と、動作の主体は公任 (入道言) であり、それを高める尊敬の「る」。問いかけているのは道長だが、敬意の対象は乗る当人の公任である。

問5 (1) 係助詞は「か」。

(2) 結びの語は「べき」で、活用形は連体形。

※疑問の係助詞「か」を受けて、文末 (結び) が連体形「べき」となる係り結び。

問6 ④「べき」＝ウ 適当・当然 / ⑫「べかり (ける)」＝ウ 適当・当然。

※④は「どの舟に乗るのがよいか」、⑫は「漢詩の舟に乗るべきであった (=乗ればよかった)」で、いずれも「～するのがふさわしい・～すべきだ」という適当・当然の意。文脈上、軽い後悔・評価を含む。

問7 (1) 終止形は「のたまはす」。

(2) 尊敬語。

(3) 作者 (語り手) から、発言の主体である入道殿 (道長) への敬意。

※「のたまはす」は「言ふ」の尊敬語で、「のたまふ」よりさらに敬意の高い語。係助詞「ば」の上で已然形「のたまはすれ」となっている (順接の確定条件)。

問8 (1) 丁寧語。

(2) 発言者である公任 (入道言) から、聞き手である入道殿 (道長) への敬意 (会話文中の敬語なので、話し手＝公任からの敬意となる)。

※「侍ら」は連用形「乗り」に付く**補助動詞**で、「(和歌の舟に) 乗りましょう」と聞き手への改まった気持ちを表す丁寧語。本動詞の「侍り」(お仕えする・お控えする)なら謙譲語だが、ここは補助動詞なので丁寧語とするのが標準。〔この種の「侍り」を丁寧語(謙譲語の一種)と説明する立場もある。〕

問9 イ 念を押し、強く言い切る。

※「ぞ」は強意、「かし」は念押しの終助詞で、「(公任が) お詠みになったのだよ(ほんとうに見事だ)」と、語り手が読者に強く念を押しして言い切っている。

問10 (1) 小倉山から吹き下ろす嵐(山風)が寒いので、(散りかかる紅葉が人々の衣にかかり、)紅葉の錦を身に着けない人は一人もいないことだ。

(2)「もみぢの錦」は、色とりどりに散りかかる美しい紅葉を、織物の錦(にしぎ)にたとえた表現。鮮やかな紅葉を高貴な錦の衣に見立てている。

(3)(例) **比喩(隠喩・見立て)**…「もみぢの錦」が、紅葉を錦にたとえた比喩表現である。〔別解として、「小倉山」という歌枕(紅葉の名所)を詠み込んでいる点を挙げてよい。〕

※「寒ければ」は形容詞「寒し」の已然形+「ば」で、原因・理由(〜ので)を表す順接の確定条件。

問11 打消の助動詞で、終止形(基本形)は「ず」。

※「錦着ぬ人」で、連体形「ぬ」が体言「人」に連なっている(「ず」の連体形)。完了の「ぬ」(終止形)と紛らわしいが、ここは下に体言が続くため打消「ず」の連体形。

問12 活用形は**連体形**。係助詞「ぞ」がなければ、終止形の「なし」となる。

※「着ぬ人ぞなき」は「ぞ」の結びで連体形「なき」。「ぞ・なむ・や・か」は連体形で結ぶ。

問13 ウ 伝聞・推定。

※「のたまふなる」の「なる」は、伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形。「〜とおっしゃるということだ・おっしゃるそうだ」と、語り手が人づてに聞いた内容として述べている(断定の「なり」は体言・連体形に接続するが、ここは終止形「のたまふ」に接続している点からも伝聞・推定と判断できる)。

問14 (自分は)漢詩(作文)の舟に乗ればよかったなあ。

※「作文のに」の「の」のあとに「舟」が省略されている。「べかり」は「べし」の連用形で、ここでは「(そうす)べきであった=〜すればよかった」という**適当・当然+過去のニュアンス**。和歌の舟を選んだことを軽く悔やむ気持ち。

問15 公任は和歌の舟で名歌を詠んで称賛されたものの、もし漢詩の舟を選び同じほどの出来の漢詩を作っていたら、**名声はあっそう高まっただろう**と考えたから。当時、和歌よりも漢詩のほうが格式が高いものとされ、より大きな名誉につながると意識されていた。つまり、複数の道に通じる自分なら漢詩でも成功できたはずだという**自負**と、より高い名声を得る機会を逃したという**わずかな後悔**から、「作文の舟に乗ればよかった」と漏らしたのである。

※あわせて「殿に力量を見込まれて得意になった(心おごり)」と素直に認めている点にも、公任の自負がにじむ。

問16 イ 「ましかば〜まし」による反実仮想。

※「(実際にはしなかったが) もし漢詩を作っていたならば、名声が上がることもいつそうまきつていただろうに」という、事実と反する仮定とその帰結を述べる反実仮想の構文。「ましかば…まし」がその典型。

問17 残念であったことよ。／くやしいことであったなあ。

※「口惜し」は「残念だ・くやしい」、「かな」は詠嘆の終助詞。

問18 道長から「どの舟に乗るか」と(自分の力量を見込んで)尋ねられたことで、自分は一目置かれている・誇らしいという、得意になり自尊心がくすぐられた気持ち。

※「心おごりせられし」=われながら得意な気持ちにならずにはいられなかった、の意。「られ」は自発。

問19 語り手は、ふつうは一つの分野にすぐれているだけでも立派なことであるのに、公任は漢詩・和歌・管絃という三つの道のいずれにも抜きん出ている点を、「昔にも例のないことだ」と最大級に称賛している。多才で、どの分野でも一流であったことへの感嘆である。

問20 ウ 「〜さえも」(程度の軽いものを挙げて重いものを類推させる)。

※「一事のすぐるだにあるに」=「一つの事にすぐれているのさえ(めったにないこと)であるのに」。軽い例(一芸に秀でること)を挙げ、それより重い内容(三つの道すべてに秀でること)のすばらしさを類推させる用法。

問21 丁寧語。

※最終文「いにしへもはべらぬことなり」の「はべら」は、語り手が聞き手(読者・対話の相手)に対して改まった気持ちを表す丁寧語で、「ごさいません」の意。⑥の会話中の用法とは働きが異なる点に注意。

問22 漢詩(を作ること)。「作文(さくもん)」は、ここでは漢詩文を作ること、すなわち漢詩を指す。

問23【文学史】(1) 歴史物語 (2) 藤原道長(の栄華) (3) イ 平安時代後期 (4) 紀伝体 (5) 四鏡(しきょう)

※『大鏡』は平安時代後期に成立した歴史物語で、藤原道長の栄華を中心に、大宅世継(おおやけのよつぎ)・夏山繁樹(なつやまのしげき)という二人の老人の対話形式で語られる。中国の『史記』に倣った紀伝体(帝紀+列伝)で書かれ、批判精神に富む点が特色。『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』を合わせて「四鏡」と呼ぶ。